

金属産業新聞(5面)に掲載されました

ねじ締め機、省力化で伸び

原材料の高騰で利益減

精工 2Q 第2 日東

日東精工(株)(京都府綾部市、材木正己社長)は、2019年12月期第2四半期決算短信によると、連結売上高が166億5800万円(前年同期比3.9%増)、営業利益は13億2700万円(同8.4%減)、経常利益は14億1000万円(同7.2%減)、四半期純利益は8億9600万円(同4.0%増)となった。

た。なお営業利益は原料の上昇と精密ねじの減少、為替の影響により、前期比から4割減少した。

けは、販売が伸びて前期比から20%の増加。自動車業界向けは品質・省力化ニーズを受けて部品検査装置が伸びた。

て、ねじからパーツ(高能部品)への技術展開を目指すとしており、これを目的にCNC自動旋盤や穴あけ・タップの二次加工機や太物用ヘッダーの設備を導入。冷間圧造技術とプレス技術を組み合わせた異種金属接合部品として開発を進めてきた技術「アクロース」は量産設備を整えて、現在、リチウムイオン電池、電力インフラ関係、空調機関連への採用に向けて取り組んでいる。

8月27日に都内で行われた決算説明会で、材木社長が投資家に向けて業績を報告した。

検査装置が自動車業界向けに好調だった。また米国のタイなど海外を中心に人手不足を背景にした自動化設備が好調に推移。

基板など自動車電装化の増加に伴う座金組込ねじが伸びた。また軽量化や品質向上に貢献するキザタイトやアルミタイトなどのセルフタッピングねじが好調。同じく売上の大きい電機・電子部品向けは中華圏での受注が減少したものの、子会社化した伸和精工の売上が前年

同期比6.2%増と貢献した。住宅・建築向けは、建築用ボルトの需要が引き続き旺盛。雑貨のゲージは前期から減少。一旦復調しつつも期間を通しての数量は伸びなかつ

けが減少した。制御システムは、地盤調査機「ジオカルテ」の更新により住宅・建築向

ツトが大幅に増加した。

産機事業では安川電機と共同開発している「多関節ねじ締めロボット」や、ねじ締め機のデファクトスタンダードを目指した開発への取組みを強調した。

自動車向けが好調

昨年5月に精密プレスメーカーの(株)伸和精工(長野県)を連結子会社化するなど事業領域の拡充により増収を達成。独自のセルフタッピングねじや自動組立装置、画像検

て営業利益が減少した。ファスナー事業のうち高いウエイトを占める自動車業界向けは、ECU

た伸和精工の売上が前年

しての数量は伸びなかつ

更新により住宅・建築向

ツトが大幅に増加した。

強調した。